

Q & A

Q カリキュラム・マネジメントとは、具体的にどのような実践をしたらよいのでしょうか。

A 「カリキュラム・マネジメント」のねらいは「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図ること（総則第1章第1の4）」にあります。

各学校では、これまでも、学校の教育目標の実現に向けて、教育課程の編成の基本方針を定め、各種指導計画を作成し、指導体制を含めた校務分掌を整え、授業の実施に必要な予算を配当したり、地域からの協力を得ながら、それらに基づいた日常の授業を展開し、授業の成果や課題を見取ったりしながら、次年度の改善につなげるといった形での教育活動の質の向上を図ってきていると思います。

その意味では、「カリキュラム・マネジメント」は、全く新しい方法を導入することを目的とするものではありません。むしろ、自校にある「学校の教育目標」や、その実現に向けた「教育課程の編成の方針」、「各種指導計画」、「校務分掌や予算の配当などの人的・物的な体制」が、**自校の教育活動の質を最大限に高めることができるものとなっているか、教科等を超えて育成される学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応する資質・能力がねらいどおりに育成されているか、地域の人的・物的資源の活用について考えることはできないか、**といった点について、**学校として組織的、計画的、継続的に、**その実施状況を把握して、改善を図っていく視点をもつことが重要です。

「カリキュラム・マネジメント」の充実を図るためには、例えば、①学校評価との関連付けを図り、PDCA サイクルを機能させること、②職員会議や学年会、教科主任会など既存の関連の会議の場を生かすこと、③学校運営協議会や学校評議員会、保護者説明会、学校だよりなどを活用することなどが考えられますが、それぞれの学校の実態に応じて、**既存の取組や組織を生かしつつ、**その取組の質の向上を図っていくことが求められます。（文科省資料から）

Q カリキュラム・マネジメントにおける「教科横断的な視点」とは。

A 予測困難で変化の激しい時代に対応するためには、多様な知識を結び付けて思考を深め、新たな課題の発見、さらには、解決の道すじを発見する資質・能力が求められます。多分野の知識を学び、習得するための体系化されたカリキュラムのもと、**各教科の相互の関連を図ることによって、それぞれ単独では生み出せない教育効果を発揮させ、子どもたちにこうした資質・能力を育成することが「教科横断的な視点」の要となります。**ある教科や単元で学んだ成果が定期試験で確認されるだけでなく、その教科や単元で得た成果を様々な場面で他者と協働しながら主体的に問題解決的に活用していくことができる**汎用的な能力**が求められています。

Q 「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）と「カリキュラム・マネジメント」の位置付けは。

A 「主体的・対話的で深い学び」は、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指すものではなく、子どもたちの質の高い学びを引き出す様々な工夫を意図しています。子どもたちに必要な資質・能力を身に付けさせるためには、各教科等の授業とともに、教科等の枠を超えて単元間をつなげていく教科横断的な授業の視点が欠かせません。**育成を目指す資質・能力をどのように育むのかという観点から授業改善や組織運営の改善が必要**となります。**教育課程を核に、授業改善と組織改善を一体的に行うのがカリキュラム・マネジメント**です。

校長を中心に、教科の縦割りや学年を超えて、学校全体でカリキュラム・マネジメントに取り組めるよう学校の組織及び運営について見直しを図ることが必要です。その際、管理職のみならず**全ての教職員がその必要性を理解し、日々の授業について教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む必要**があります。

Q カリキュラム・マネジメントを効果的に行うためには。

A 多くの教職員にとって、各教科等については年間指導計画や単元計画等で実感をもって捉えていますが、教育課程となると抽象度が高くなり日常の授業から離れてしまいがちです。校長は学校のビジョンを明確に掲げ、育成を目指す資質・能力について、校内で共通理解を図り、組織の推進力と方向性を整えることが大切です。

全ての教職員がカリキュラム・マネジメントを実施するには、**教務主任や研究主任を中心に、**育成を目指す資質・能力に関する各教科等からのアプローチなど多様なスタイルの校内研修を通して、全ての教職員が自ら専門（得意）とする教科等を起点に、その枠を超えて教科等の相互関連や教育活動と教育課程との関連で捉え、教育課程の改善に参画していく意識を浸透させていくことが必要です。

カリキュラム・マネジメント

■学校教育目標とカリキュラム・マネジメント

- ・ 各校の教育課程編成の基本となる学校教育目標は、法令に定める学校教育の目的や目標、教育課程の基準に基づき、「学校教育の重点」を中心に、新学習指導要領のポイントや中学校ブロックの小中一貫教育方針等を踏まえ、当面する教育課題の解決を目指して設定することが重要です。
- ・ 学校教育目標に照らしながら各教科等の授業を改善し、**教育課程の実施状況を評価することができるよう、学校教育目標は育成を目指す資質・能力を具体的に示す**ことが必要です。
- ・ 育成を目指す資質・能力をもとに、学校教育目標を見直すことで、日々の教育実践と育成を目指す資質・能力の結び付きが明確になります。大切なことは、**全ての教師が学校教育目標の設定に関わり、共有化**したうえで、その実現を目指して日々の教育活動を実践・評価・改善していくことです。

■教育課程編成とカリキュラム・マネジメント

- ・ 学校教育目標の実現を目指して教育活動を進めるにあたっては、育成を目指す資質・能力を効果的に育めるよう、全体のバランスに配慮し、創意工夫ある教育課程を編成することが大切です。

- ◇学校教育目標の設定および教育課程の編成作業は、全教職員の協力の下に
- ◇効果的な教育課程編成のため、学級や学年、教科等の枠を超えて教師同士が連携協力
- ◇校長が学校全体の責任者として指導性を発揮し、統一感・一貫性をもった教育課程を編成

教育課程編成の責任者は校長ですが、教務主任、研究主任の役割には大きいものがあります。

教務主任：全教師のリーダーとして、各教科等や学校行事等あらゆる教育活動を掌握・整理し、組織運営や教育課程編成の中核的な役割を担います。

研究主任：各教科主任等を束ねて、自校の研究実践、授業改善の中核的な役割を担います。

- ・ 単元配列表を活用して、育成を目指す資質・能力に基づき、**共通点を関連付け、効率的かつ効果的な学びになるよう、**以下3つの視点から**教科横断的な視点で教育内容の配列**を検討します。
- ・ 育成を目指す資質・能力をもとにした関連表（**教科横断的な視点を中心とした関連表**）や、関連表をもとに**育成を目指す資質・能力ごとに実施時期や教科相互の関連を考慮した関連単元配列表を作成**します。
- ・ 先に実施した単元や題材で身に付いた資質・能力が、後から実施される単元や題材で活用・発揮されるよう**「順序性」を意識した関連単元配列表**を作成し、育成を目指す資質・能力を確かなものにします。

教科横断的な視点

目標の実現に必要な教育の内容を、教科横断的な視点で組織的に組み立てて（改善して）いくこと

PDCAサイクルの視点

教育内容の質の向上を図るため、教育課程の実施状況を評価し、その改善を図っていくこと（PDCAサイクルを機能させた学校経営）

人的・物的資源等の効果的な活用の視点

「社会に開かれた教育課程」の観点から、教育課程の実施に必要な人的・物的な体制を確保（外部リソースを活用）し、その改善を図っていくこと

- ・ なお、育成を目指す資質・能力をもとにした学校教育目標に基づき、カリキュラム・マネジメントを行うことで、他教科との関連を踏まえた単元構想（指導内容の焦点化）や学校行事の精選など、**教育活動の効率化を図ることも重要**です。

■「総合的な学習の時間」とカリキュラム・マネジメント

- ・ 教育課程総体を通して育成を目指す資質・能力を具現化する中核的な学びとして「総合的な学習の時間」を位置付け、全教職員参加のもと、各教科の学びとの相互の関連を図ります。
- ・ 児童生徒や学校、地域の実態等に応じて、ふさわしい探究課題を設定する「総合的な学習の時間」に加え、道徳科（道徳の時間）や特別活動（学校行事等を含む）を軸に、各教科等と関連付けた教育実践を学校教育目標の実現に結び付けていくことが大切です。

■カリキュラム・マネジメント実施の手順

①学校課題を把握する

個別の課題を把握し、本年度に解決を目指す課題を焦点化します。

- ☐ 学校教育目標は、学校の実態や課題に則して具体化されているか。
- ☐ 学校教育目標は、教職員全員に共有化されているか。
- ☐ 学校が重点的に取り組むべき課題は、明らかにされているか。
- ☐ 学校が重点的に取り組むべき課題は、教職員全員に共有化されているか。
- ☐ 校内研修（研究）等を進めていくための組織は整備されているか。

②学校教育目標を見直す

学校の実態と課題を踏まえ、学校がこれまで大事にしてきた基本方針や校訓、保護者や地域の願いなどから、育成を目指す資質・能力を具体的に示した目標を設定します。（教育指導計画を含む）（総則第6項を参照）

③学校体制を組織し教育活動を実施する

従来から実施してきた活動、新たに取り組むべき活動を精査し、学校教育目標の実現に向けて、1年間の教育活動を組みたて実施します。また、それに必要な指導体制を整えます。

④教育成果を評価する

「評価のための評価」ではなく「改善につなげるための評価」を行います。評価の視点（数値で表す、子どもたちの姿など）を内外に共有して評価を行うことが大切です。

※一連の手順においては、「学校評価支援システム」や「全国学力・学習状況調査」の結果・分析等の実証的な数値を活用するとともに、児童生徒にどのような変容（成長）が見られたのか、具体的な姿の見取りが大切です。

■カリキュラム・マネジメントによるアプローチ

◇教育課程の編成，学校の組織運営から

- ・教育課程全体を見直し、効果的な年間指導計画等の編成
- ・学校評価やPDCAサイクルを機能させた組織運営の改善
- ・チーム学校として教科等や学年を越えた組織運営・協働体制の構築
- ・発達段階や成長過程のつながりを踏まえた他校種間の接続
- ・学校・家庭・地域の連携に向けた取組

など

◇授業改善の視点から

- ・育成を目指す資質・能力の実現に向けた学習・指導方法のあり方
- ・教科横断的な視点で学習活動を進めるための手立てや体制づくり
- ・課題の発見・解決に向けた主体的・対話的で深い学びとなる授業づくり

など

■育成を目指す資質・能力ごとに実施時期や教科相互の関連等を考慮した関連単元配列表

＜●学年 関連単元配列表＞

育成を目指す資質・能力 【思考力,判断力,表現力等の育成に関わって】		(例)事象を見つめ,追究する問題を把握する力 (例)解決の方法や手順を考え,構想する力 (例)思いや願いの実現に向けて,問題を解決し,的確に判断したり,表現したりする力			
	各教科等で育成を目指す資質・能力	4月	5月	6月	7月
総合的な学習の時間	(例)地域の「人,もの,こと」から問いを見出し,解決に向けて個や集団で,調べたり,考えたり,表現したりする力	【手順1】 育成を目指す資質・能力の設定 学習指導要領 総則 を基盤とし,学校教育目標(目指す児童生徒像),校内研究の重点,道徳教育目標(重点内容項目)等をもとに焦点化。 ・教科横断 ・行事等の精選 ・学校の特徴・ミッション		6月 【□□の単元】 探究課題△△について,体験をもとに課題をつかみ,解決するための計画(方法,手順,資料)を立てる。	
特別活動					
学校行事					
特別の教科道徳		【手順2】 手順1で設定した育成を目指す資質・能力について,各教科等で育成したい力を記す 内外リソースの活用・教科間の関連などを視野に入れ,効果的に配列する。			
国語					
社会			5月 【□□の単元】 △△という学習問題について,適切な資料を選び,問題を解決する。	【手順3】 手順1で設定した育成を目指す資質・能力について,教科横断的に関連する単元や学習活動を抽出する 年間の単元配列表を活用し,矢印でつないだり着色したりするなど工夫を加えるとよい。	
算数(数学)					
理科		4月⇒6月に変更 【□□の単元】 △△について,わかったことや気付いたことを交流し,考えを深め表現する。	【手順4】 年間を通じて 加筆・修正を行い,次の取組につなげる ⇒PDCAサイクル		
〇〇〇〇〇〇〇					
外国語					

■カリキュラム・マネジメントの全体イメージ

